

## 蒜山地質年代学研究所のあゆみー2nd ディケイドー

株式会社蒜山地質年代学研究所は2015年1月を以て創立20周年を迎えることが出来ました。創刊準備号(蒜山地質年代学研究所創立10周年記念特集)が出版された2006年から現在に至るまでを弊社の2nd ディケイドと位置づけて、この期間に起こった出来事を以下に簡単に振り返ります。

## 【2006年】

- ・井上善夫を経営アドバイザー(特別研究員)として雇用。鹿児島大学出身。第四紀層序および微化石(花粉)を専門としたが、現在は土木地質全般を専門とする。弊社初の技術士(応用理学部門)資格保有者。2級ファイナンシャル・プランニング技能士でもある。
- ・和歌山大学と協働して、山間地域(和歌山県上富田町)における洪水ハザードマップの試作研究を行う。高価なシミュレーションに頼らずに、地質調査法に基づいた現地での情報収集に重点をおいた調査によって、低コストであるにも拘らず極めて有用な洪水ハザードマップの作成が可能であることを示した。
- ・研究報告誌「地質技術」創刊準備号(蒜山地質年代学研究所創立10周年記念特集)を発行。
- ・日本地質学会第113年学術大会(高知大学)へ出展する。
- ・万成石プロジェクト(財団法人ウエスコ学術振興財団学術研究費助成金による)の共同研究(2年目)を行う(2006年4月~2007年3月)。

## 【2007年】

- ・岡山県立児童会館(現在、岡山県生涯学習センター)の太陽の丘公園において、万成花崗岩や岩脈などの地質露頭を探検しながら学ぶ「ジオトレイル」の設置に参加した。
- ・中四国しんきん合同ビジネス交流会(第3回)へ初出展した。多種多様な企業とのお見合いの場で四苦八苦しながらも、その時に会った企業と今もビジネス交流を続けている。
- ・「人類紀」とも呼ばれる第四紀の高精度年代測定を実現するために、その年代に特化した手法の研究および開発を行うことを目的として、岡山理科大学と「第四紀地質体の精密年代測定」の共同研究の契約を締結した(現在も継続中)。
- ・本社を「岡山市さい161-1」から「岡山市中島2番地5」(後に、「岡山市中区中島2番地5」に変更)へ移転する。新社屋披露パーティーを行う(10月)。
- ・曽根原崇文を地質学グループ研究員として採用。中高6年間の陸上部で鍛え上げた他の追随を許さない強靱な足腰で、濃飛流紋岩(いわゆるメソボル)の岩石学的研究によって2006年3月に学位取得(信州大学)。道路、鉄道、活断層、ダム、温泉等を対象とした地質調査および解析業務を担当している。
- ・高田卓也を再雇用(地質学グループ所属)。紹介文は2006年発行の創刊準備号に書かれている。

- ・日本地質学会第114年学術大会(北海道大学)へ出展。
- ・K-Ar年代測定のための極低ブランクK分析を開始。

## 【2008年】

- ・西村貢一(地質学グループ主任研究員)が技術士(応用理学部門)となる。
- ・奥村 輔を有期雇用(年代学グループ所属)。岡山理科大学自然科学研究所へ出向(2009年3月まで)。カソードルミネッセンスを用いた鉱物学およびその地球科学への応用を研究テーマとして2007年3月に学位取得(岡山理科大学)。OSL(光励起ルミネッセンス)法の研究開発を始める。
- ・ESR(電子スピン共鳴)法の運用開始。

## 【2009年】

- ・奥村 輔が契約期間を満了して3月に退職。
- ・7月に神戸支店を開設(兵庫県神戸市兵庫区兵庫町1丁目3-28)。井上善夫を支店長として、地質学グループの拠点とする。
- ・日本地質学会第116年学術大会(岡山理科大学)へ出展。ポストドク(PD)問題に関する展示とアンケートを行う。学会の実行委員会に参加し運営側としても携わる。

## 【2010年】

- ・高野 進を雇用。エレクトロニクス商社、岡山大学地球物質科学研究センターを経て、弊社に至る。質量分析計の立ち上げ、修理およびメンテナンス業務を担当する。
- ・高田卓也が自己都合により退職。
- ・OSL(光励起ルミネッセンス)法の試験運用の開始。
- ・TL(熱ルミネッセンス)法の試験運用の開始。

## 【2011年】

- ・東日本大震災発生(3月11日)。地質に携わる技術者・研究者が防災・減災に関する将来への備えとしてどのような貢献ができるのかを考える契機となり、第四紀地質体の精密年代測定の研究がより一層重要となる。
- ・藤原 誠を年代学グループ研究員として採用。阪神淡路大震災を経験する。研究テーマは火砕流の流動・堆積機構の解明で、弊社では岩石・火山灰の鑑定業務および樹脂固化・半割研磨標本作製等を担当している。
- ・地質調査業者として登録(質23第2567号:中国地方整備局)。
- ・生駒分室を神戸支店に編入。
- ・研究報告誌「地質技術」創刊号(より高精度高確度の放射年代測定を目指して)を発行。
- ・日本地質学会第118年学術大会(茨城大学)へ出展。

## 【2012年】

- ・コア試料および大型ブロック試料の樹脂固化・半割研磨法の改良研究を実施。
- ・研究報告誌「地質技術」第2号(西南日本内帯の白亜紀~古第三紀珪長質火成岩類の年代学的研究)を発行。
- ・日本地質学会第119年学術大会(大阪府立大学)へ出

展。

- ・岡山理科大学へ非常勤講師派遣を開始（現在に至る）。

#### 【2013年】

- ・特定労働者派遣事業の登録（特 33-300828）。
- ・田村 肇を採用（年代学グループ所属）。4月より日本原子力研究開発機構東濃地科学センターへ出向。山形大学大学院修士課程修了。海洋研究開発機構を経て、弊社に至る。希ガスの質量分析を専門とし、アルゴン系の年代測定を得意とする。
- ・本郷（旧姓：草野）高志が家業を助けるために退職する。
- ・研究報告誌「地質技術」第3号（断層の活動性評価手法の向上を目指して）を発行。
- ・日本地質学会第120年学術大会（東北大学）へ出展。
- ・岡山本社に試料の研磨室および保管室を増設。
- ・後藤隆嗣を地質学グループ研究員として採用。島根大学大学院単位取得後退学。中新統～鮮新統の浮遊性有孔虫化石および石灰質ナノ化石等の微化石群集に基づいた堆積環境と地史の解明を専門とする。

#### 【2014年】

- ・後藤隆嗣が学位を取得（島根大学）し、4月より年代学グループへ異動する。
- ・香本佳彦を地質学グループ研究員として採用。北海道大学大学院修士課程中退。二枚貝の成長線解析および質量分析器を用いた微量元素分析による古環境復元を研究テーマとした。急傾斜地の点検を得意とする会社や地元の鍛冶屋を経て現在に至る。
- ・小畑直也を年代学グループ研究員として採用。奈良教育大学大学院修士課程修了。堆積物およびテフラのOSLおよびTL測定から旧石器遺跡の年代を推定してきた。鳥取県の博物館、考古学の自然科学分析会社で

の勤務を経て、弊社に入社し、OSLおよびTL法の本格運用の準備を進めている。

- ・特定非営利活動法人地球年代学ネットワーク（jGnet）に参加。
- ・研究報告誌「地質技術」第4号（斜面崩壊の素因を探る）を発行。
- ・日本地質学会第121年学術大会（鹿児島大学）へ出展。
- ・岡山本社に石工室、分離室および顕微鏡室を増設。
- ・後藤隆嗣を島根大学汽水域研究センターでの社外研究に従事させる（11月～翌年3月）。

#### 【2015年】

- ・藤原 誠が学位取得（神戸大学）。
- ・曽根原崇文が技術士（応用理学部門）となる。
- ・長谷川 航を地質学グループ研究員として採用（所属）。北海道大学大学院および京都大学大学院修了。2015年3月に学位を取得（京都大学）。洞窟のモニタリング研究から洞内微気象、鍾乳石成長および地表環境の関係を研究テーマとした。
- ・生駒分室を廃止。
- ・ロープアクセス調査事業の開発と運用準備。急崖地での防災点検、地質踏査および試料採取等の新たな需要を開拓する。
- ・研究報告誌「地質技術」第5号（蒜山地質年代学研究所創立20周年記念特集）を発行。
- ・岡山市にて創立20周年記念講演会および懇親会を開催する。

2015年8月1日

研究報告誌「地質技術」編集委員  
八木 公史